

# イギリス小説の中の女たち

## ——イギリス小説の抬頭と女性差別の時代——

杉 山 泰

### (1)イギリス小説の抬頭と「男時」の商社の時代

イギリスの小説 (novel) は、デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の『ロビンソン・クルーソー』 (*Robinson Crusoe*, 1719) とリチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) の『パミラ』 (*Pamela*, 1740) によって始まる、と言われている。また、その2冊に加え、スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の『ガリヴァー旅行記』 (*Gulliver's Travels*, 1726) を追加することもできるだろう。18世紀の初頭に、不思議なことに、一人称「わたし」の体験を具体的に語る散文で書かれた物語が登場したのである。もちろんすべては「うそ」(fiction) にすぎないのだが、ここに登場してきた、無人島で28年と2ヵ月と19日間の孤独な生活を送った「ロビンソン・クルーソー」や、若旦那の執拗な誘惑にも負けず純潔を守り通した家事使用人「パミラ」、それに、人間以外の住む世界を体験した「ガリヴァー」という3人の主人公は、まさしく個人としてそこに存在している。悩める人の代表としてのハムレットではなく、特殊な個人として人間をリアルに描きだしている。18世紀という新しい時代を迎えると同時に、イギリスでは「小説」というまさしく「新奇な」novel が生まれてきたのである。

イギリス小説の父、リチャードソンは、51歳にして爆発的な売れ行きを示した『パミラ』を書いた。が、実は、出版社を経営し、小さい頃から手紙の代筆を得意としていた。デフォーもスウィフトも60歳を超えて小説を書きだすのだが、若い頃は、週刊誌や新聞という定期刊行物に政治記事を書いていた。デフォーがホイッグ党を、またスウィフトがトーリー党を支持していたことはあまりに有名である。ホイッグ党員のステイール (Richard Steele, 1672-1729) によって『タトラー』 (*The Tatler*) が1709年に創刊され、アディソン (Joseph Addison, 1672-1719) によって1711年に日刊紙『スペクテイター』 (*The Spectator*) が創刊されている。さらに、ケイヴ (Edward Cave, 1691-1754) によって1713年に『ガーディアン』 (*The Guardian*) が企画され、ステイールとアディソンが編集を担当した。18世紀初頭とは、まさしく「ジャーナリズム抬頭の時代」であり、何よりも「事実」が重視された時代であったと言える。<sup>1)</sup>

しかし、18世紀初頭でもう1つ見逃してはいけないことがある。それは男たちが船に乗って世界各地に出かけた時代、すなわち、「植民地開拓という男時の時代」であったということだ。「ロビンソン・クルーソー」も、「ガリヴァー」も、船に乗って世界を旅した船乗りであった。この植民地の開拓によって巨大な富を得たからこそパミラの若旦那の Mr. B は家事使用人を何人も雇い、何不自由なく大邸宅でのんびりだらりの生活ができていたのである。

1709年、東インド会社は320ポンドの資本金で新しい株式会社となり、35万2306ポンドの収益をあげている。この株式会社のバブル経済に目をつけたデフォーは、1711年「南海会社」の設立に加わり、1株額面100ポンドの株価が、わずか3ヵ月後に10倍以上に跳ね上がり、この時、スウィフトも当然

のごとく株に手を出したのだった。が、4月15日に売り出した株も9月にはそのバブルが完全にはじけ、巨万の富は一片の紙切れとなってしまったのだった。<sup>2)</sup> 株に財産を注ぎ込み、バブルがはじけてそのすべてを失ってしまったスウィフトの姿が、ガリヴァーその人と重なってくる。商社の時代の幕開けと見られる「東インド会社」、「南海会社」の設立は、しかし、世界中にイギリス人男性を駐在させ、植民地からこうした商社によって吸い取られた富は、ロンドンの「シティ」へと流れ、イギリスはまさに「男時の商社の時代」へと突入する。

1719年、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』によって幕を開けたイギリス小説は、その時代を反映するかのごとく、すべて男性作家によって書かれていく。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、女性がなぜ19世紀になるまで小説が書けなかったのか、ということをも1928年、女子大生に講演してこう述べている。

小説を書くためには①お金と、②余暇、そして③自分だけの部屋が必要であった。ところが、英国の歴史はまさしく男性の歴史であったがために、女性はその3つのうち、どの1つも与えられてはいなかった。<sup>3)</sup>

なるほど、18世紀において、女性は参政権どころか、大学で教育を受けることも、夫の財産を譲り受けることもできなかった。19世紀になって、堰を切ったかのようにどっと現われてくる女性作家たち、ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) やブロンテ姉妹やジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の描く世界は、これまた不思議なほど「女性と結婚」がそのテーマになっている。女性の自立への道が結婚にしかないかのような印象すら受ける、これらの女性作家による小説は、しかし皮肉なことに、中産家庭の有閑女性たちによって読まれたことは間違いない。いわゆる *respectability* (世間体) を重んじる中産家庭の主婦たちは、コック、パーラーメイド、ハウスマイドの最低3人の家事使用人を置いていたので、ヴィクトリア時代に入ると、女性も余暇だけは手に入れることができたのである。女性読者の誕生というのが、イギリスにおける小説の抬頭にとって極めて大きな影響力を与えたであろうことは容易に想像できる。

東インド会社に代表される「男時の商社の時代」、ロビンソン・クルーソーやガリヴァーのように、海外へ海外へとイギリス男性が出ていった時代に、「余った女たち」が自立の道を求めて少なくなった男性を追い求めていく「結婚小説」、それがイギリス女性作家の最初の小説であった、といえ言いすぎであろうか。

## (2) 小説抬頭以前の「女性のための書物」<sup>4)</sup>

18世紀に入って、1702年には最初の新聞が出版され、1708年には、ロンドン市内に3000軒以上もの *coffee-house* が存在し、<sup>5)</sup> そこで政治的パンフレットが回し読みされ、デフォーやスウィフトなどはこの時期こうした政治的パンフレット執筆で忙しかった。600万近い市民が住む大都市ロンドンで、1704年には週刊誌が毎週4万3800部も出版され、印刷業者の数も1724年には75社に増えていた。<sup>6)</sup> 労働者の平均賃金が週10シリングズの時代に、初版が1部5シリングズもする『ロビンソン・クルー

ソー』を買えるロンドン市民はそう多くはなかったにもかかわらず、「それでも年を取った女性が買う<sup>7)</sup>」のだった。1719年4月25日に第1部が出版され、8月8日までには4版を重ねた。8月20日には第2部が、さらにあまりの人気のため、翌年1720年には第3部までが出版されている。ヨーク出身のロビンソン・クルーソーの28年間にもおよぶ無人島での冒険談だが、ヨークを出帆してロンドンに出て、ギニア行きの船に乗り込み、そこでそれなりの成功をおさめる。アフリカへの2度目の航海の途中海賊に襲われ、奴隷として2年を過ごした後逃げだし、ポルトガル船に助けられ、ブラジルへと上陸する。そこで4年間農業を経験し、再び奴隷を捜しにアフリカへと向かうが、その途中船が難破し、オリノコ河口の小島に打ちあげられるのである。1659年9月30日のことであった。1686年12月19日までの無人島での生活こそが、あの有名な『ロビンソン・クルーソー』の冒険話ということになる。

今日この作品を読めば、無人島で過ごす以前の描写の中に当時のイギリスの姿がより鮮明に描かれていることが分かる。「ジャーナリズム抬頭の時代」とは、「事実」を庶民に伝え、その書かれた「事実」の情報を文字で読み取ることのできる時代でもあった。印刷術の発達はもちろんのこと、世界の情報をロンドンに集めるための航海術の発達、「シティ」を中心にした貨幣経済の発達がまず必要不可欠だった。新聞や週刊誌、それに政治的パンフレットの出版は、18世紀の半ばを迎えると、エドワード・ケイヴによる月刊誌『ジェントルマンズ・マガジン』(*Gentleman's Magazine*, 1731)の発刊へとつながっていく。その題名通り、男性読者を想定し、デフォーやスウィフトが肩入れをしたホイッグ党やトーリー党といった政治的パンフレットとは違って、「不偏不党」の立場を貫き、ジェントルマンらしく穏やかで中庸の精神を貫き、あくまであるがままの「事実」を書いていくことを宣言している。<sup>8)</sup>

男性によって創刊されたこうした雑誌や小説は当然男性読者を想定していた。しかし、皮肉なことに、こうした雑誌や小説を読む読者の中に、かなり多くの女性が存在していた。17世紀は政治の時代であり、王党派と議会派の対立、今日の2大政党の幕開けの時代であった。それ故女性はこうした政治的対立の時代にあっては、排除され、折しも、1644年3月、魔女発見将軍 (witch finder general) という異名を持つマシュー・ホプキンス (Mathew Hopkins) が現われ、サフォークなどのイングランド東部諸州を中心に300名の魔女を見つけだし、処刑にした時代でもあった。こうした時代にあって、女性が表立って小説を書き、政治パンフレットを書くことは極めて困難であったと言わなければならない。しかし、この時期、明らかに女性読者のために書かれた書物が登場したことは注目に値する。

女性のための最も古い書物の1つとしては、フィリップ・シドニー卿 (Sir Philip Sidney, 1554-86) の『アルカディア』(*Arcadia*, 1590) があげられる。パストラル・ロマンスといわれるこのシドニー卿の牧歌的物語は、自分の姉であるペンブローク (Pembroke) 伯爵夫人のために1578年頃書かれている。が、この作品が10年間で4版を重ね、17世紀には14版も発行されたのは必ずしも女性読者の急増を意味してはいない。女性はこうした騎士道的物語を読むことすら許されなかった時代であった。

この当時、明らかに女性読者を対象として書かれた最初の書物は、ジョアネス・ルドヴィカス・ヴィヴズ (Joannes Ludovicus Vives) の本を翻訳した、リチャード・ハイド (Richard Hyde) の『立ち

居振る舞いのお手本』(A Manual of Behaviour [London : Thomas Berthelet, 1529?]) であろう。同じく、トマス・サルター (Thomas Salter) の『立ち居振る舞いのお手本』(A Manual of Behaviour [London:for Edward White, 1579]) があり、この中では「女性の振る舞いと教育の重要性を強調している。特に女性の精神はつまらぬ恋愛物語、劇、バラッド、男女のいちゃつきの歌などによってひどく傷つくので、読書には十分注意を払わなくてはならない」<sup>9)</sup>と述べられている。また、ジョン・リリー (John Lyly, 1554?-1606) の『ユーフェーズとイギリス』(Euphues and His England, etc. [London : for Gabriell Cawood, 1580]) も忘れてはならない。2年前に出版された『ユーフェーズ、ウィットの分析』(Euphuse, the Anatomy of Wit, 1578) には、‘the ladies and gentlewomen of England’ という献辞がつけられていたことも忘れてはならないだろう。さらには、「5人の姉妹がいて、2度結婚し、4人の娘がいたので、中流家庭の妻と母へのアドバイスとして、中庸、美德、純潔、宗教、それに夫に従う従順な妻の生き方を強調」<sup>10)</sup>している、リチャード・ブラスウェイト (Richard Brathwait) の『イギリスの淑女』(The English Gentlewoman [London :B. Alsop and T. Fawcet, for Michael Sparke, 1631]) も女性のための書物としてあげられよう。要するに、この時期の女性のための書物とは、①婦人生活の手引書、②楽しみ (recreational)、③礼拝用という3つのものに分けられるが、主として①がもっぱら読まれた。女性が「いかにして家事を切り盛りし、どうすれば礼儀正しい立ち居振る舞いができるのか」を、男性の側から書いた書物であったといえる。もちろん、17世紀にアフラ・ベーン (Aphra Behn, 1640-89) というイギリス最初の女性職業作家がいて、デフォーやスウィフトやリチャードソンに多大の影響を与えたけれども、それ以後女性作家は、ヴァージニア・ウルフが嘆いたごとく19世紀になるまで沈黙していたのである。

### (3)イギリス植民地主義と結婚小説

日本において、1994年度人気 No.1洋画に『ピアノ・レッスン』(The Piano) が選ばれた。ジェーン・カンピオン (Jane Campion) 監督、脚本のこの映画は、1993年、カンヌ国際映画祭でグランプリを獲得したが、日本においても不思議に若者を魅了した。スコットランドに住んでいる口のきけないエイダが娘フローラと2人で遠い遠い国ニュージーランドのステュアート家の妻となるため、船ではるばるやってくるという話である。19世紀ヴィクトリア時代の気品の高い女性エイダが、先住民のマオリの文化に包まれたニュージーランドの海岸に荷物と一緒に運ばれてくるところからこの物語は始まっている。そのひととき大きな荷物には、エイダが最も大切にしていたピアノが入っていた。夫となるステュアートは、しかし、このあまりにも大きく重い荷物を海岸に残したまま、エイダとその娘フローラを連れてわが家へと向かう。

口のきけないエイダにとって、ピアノは自分の生命以上に大切なものであったが、女性の扱いに慣れていないステュアートはそのことに気づかない。もともとパケハ (白人) だが、今ではマオリ人になりきっているベインズという男が、エイダのピアノへの愛着を察して、ピアノと自分の土地の交換をステュアートに持ちかける。ピアノと引き替えに広大な土地を手に入れた夫ステュアートは、妻となったエイダをベインズの家へと「ピアノレッスン」をやらせに行かせる。しかし、そのために、1台のピアノをめぐる、エイダと2人の男の間に愛憎半ばする三角関係が展開していく。

まさしく、ニュージーランド版『嵐が丘』と言えるかもしれない。

作品そのものは上流階級を象徴するピアノが最後に海の底に沈んでいくシーン1つを取っても、極めて象徴的であり、さまざまな解釈も可能である。しかし、この作品で忘れてはならないことが1つある。それは、19世紀の半ばのニュージーランドに、スコットランドからなげ子連れのエイダが船に乗ってやってきたのか、という点である。

答えは極めて単純明快だ。1851年15歳以上の独身女性が276万5000人であったのに、1871年には322万8700人になっていた、という事実がそのすべてを語ってくれる。すなわち、ヴィクトリア時代の半ばわずか20年の間に、独身女性の数が16.8%増加しただけでなく、配偶者を持つ見込みのない女性の数は、7万2500人から12万5200人へと72.7%も増えていたのである。<sup>11)</sup>原因は、男たちが植民地へと一攫千金を狙って大量に旅立ったためであり、それに伴って、男性の晩婚化が進み、「男時の商社の時代」は、イギリス国内において大量に女が余った時代でもあったのである。それ故、イギリスの女たちにとって、何よりも大事なことは、それなりの男性を早く見つけて結婚することであった。19世紀に女性作家が登場した時、女性と結婚が彼女たちの小説のテーマになったことは十分納得のいくことなのである。

#### (4) 「男時の商社の時代」における女性作家の小説

①ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817)、『高慢と偏見』 (*Pride and Prejudice*, 1813)

ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』の冒頭は次のように始まっている。

独り者で、金があるといえば、後はきっと細君を欲しがっているにちがいない、というのが、世間一般のいわば公認真理といってもよい。

はじめて近所へ引越してきたばかりで、かんじんの男の気持ちや考えは、まるっきり分からなくとも、この真理だけは、近所近辺どこの家でも、ちゃんと決まった事実のようになっていて、いずれは当然、わが家のどの娘かのものになるもの、と決めてかかっているのである。

「ねえ、あなた、お聞きになって？」と、ある日ミセス・ベネットが切り出した。「とうとうネザフィールド・パークのお邸に、借り手がついたそうですね」

さあ、聞かないがね、とミスタ・ベネットは答える。

「いいえ、そうなんですのよ。だって、今もロングさんの奥様がいらっして、すっかりそんなふうなお話でしたもの」ミスタ・ベネットは答えない。

「あなたったら、借り手が誰だか、お聞きになりたくないんですの？」奥様のほうは、じりじりしてきて、声が高くなる。

「お前のほうこそ話したいんだらう？ むろん聞く分には少しも異存はないがね」待ってました、というところだ。

「ねえ、あなた、その借り手というのがね、ロングさんの奥様の話なんだけど、まだ若くて、えらい金持ちだっていうんですのよ。なんでも北イングランドの方ですって。月曜日に、四頭立ての馬車で下見に見えたんだそうですね、たいへんなお気に入りようで、さっそくモリスさん

との話を決めちまって、ミクルマス（9月29日）までには引き移ってくるんだそうですって。それに召使たちは、もう来週中にも移ってくるような話なんですのよ」

「名前は？」

「ピングリーさんとか」

「世帯持ちなんかね、それとも独り者？」

「まあ！ もちろん独り者ですわよ。独り者で、大金持ちで、なんでも年4,5千ポンドだかの収入はあるとか。素敵じゃありません？ わが家の娘たちのことを考えても」

「そりゃまた、どうしてだね？ わが家の娘とどんな関係がある？」

「まあ、じれったいだったら。あなたって人は、どうしてそうなんでしょうねえ。よござんすか、わたしはね、もしかして家の娘のだけかと結婚するようなことにでもなればと、そのことを考えているんじゃないませんか」

「そんなつもりで、引越してくるのかい？」

「つもりですって！ バカバカしい、よくもそんなことがおっしゃられますわねえ。でも、どうかした拍子で、家の娘と恋に落ちるとのことだって、結構考えられますわよ。だからね、あなた、引越して見えたら、さっそく挨拶に行ってくださいたいの」

……

ミスタ・ベネットという人物は、抜け目のない機敏さと、ちょっぴり皮肉と、用心深さと、気まぐれとが、不思議に入り混じった男だった。おかげで、夫婦生活32年の経験をもってさえ、いったいどんな人間なのか、奥様にもよく分からないのだった。一方奥様のほうはというと、これはずっと簡単だった。頭が悪くて、物知らずで、しかもひどいお天気屋だった。気に入らないことがあると、ひとり勝手に気に病んでいる。なにしろ人生の目的というのが、娘たちをかたづけることであり、楽しみといえば、人を訪ねて世間話に時を消すことだった。<sup>12)</sup>

このあまりに有名な『高慢と偏見』の冒頭の第1章全文を『文学論』に載せて日本人に紹介したのは、かの夏目漱石であった。「Jane Austen は写実の泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して枝神入るの点に於て、優に鬚眉の大家を凌ぐ。余云う。Austenを賞翫する能はざるものは遂に写実の妙味を解し能はざるものなりと」<sup>13)</sup>と「写実の泰斗」としてのオースティンを高く評価している。この第1章が「即ち此一節は夫婦の全生涯を一幅のうちに縮写得たるの点に於て尤も意味深きものなり」<sup>14)</sup>と結論づけている。

夏目漱石は1900年10月28日、パリからロンドンのガウアー街76番地の宿にたどりついた。翌29日にポーア戦争で南アフリカへの帝国主義的侵略を開始したことを象徴するかのように、戦争で勝利をおさめ帰国した義勇軍の凱旋行進を漱石は「困却した」様子で眺めていた。<sup>15)</sup> 植民地獲得に狂奔するイギリス帝国主義の絶頂期ではあったが、経済的には、アメリカに抜かれ、ドイツにも追いつかれようとしていた。しかし、海外への植民地政策を強引に押し進め、食料の自給率を30%近くまで落とし、あらゆるものを国外から輸入することで経済の建て直しを図ろうとしていた。これまで繁栄してきた地方の工業都市は衰退し、1890年、ロンドンに電車による地下鉄を開通させたことによって、

ロンドンの一局集中は加速され、650万人都市として繁栄していた。が、また一方で、人口集中によってロンドン公害都市というこれまで経験することのなかった悲惨な都市の状況を呈していた。産業革命によってロndonは一見繁栄していたものの、マルクスやエンゲルスが冷静に分析したように、<sup>16)</sup>19世紀半ばのロンドンの労働者の生活ぶりは繁栄とは裏腹に悲惨そのものであった。ステイヴンソン (R.L.Stevenson,1850-94) の『ジキル博士とハイド氏』(The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde,1886) を愛読したという漱石は、1900年のロンドンの姿をこの作品の中に象徴的に読み取っていたのかもしれない。農業国を自らの手で捨て去り、工業国へと切り替えた大英帝国は、その当然の帰結として「田園」を失った。「田園」は荒廃し、まさしく荒地と化した。産業革命で失った「田園」「家庭」「村落協同体」といった世界を、しかし、みごとに表してくれた作品を漱石はロンドンで発見したのである。それが、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』であった。1901年1月23日、ヴィクトリア女王の死を漱石が知ったのは、彼がもうすぐ34歳の誕生日を迎えようとしている時であった。産業革命を経て、巨大都市として発展したロンドンで、その近代化のエッセンスを学んでくるとを国家から託された漱石は、その近代化の底に恐ろしい人間破壊の化物が住んでいることをも感じ取っていた。金こそが国を動かす近代化の弊害とエゴイズムの蔓延が人間の孤立化をもたらすことを学び取った漱石は、そこからの脱却の道を、「家 (home)」と「田園」の中に、すなわち古きよきイギリスの田園生活の中に見いだそうとしていた。わずか2年間の英国滞在であったにもかかわらず、漱石はその苦しかった2年間の経験の中から、『文学論』という、みごとな作品を書きあげたのである。大英帝国が成し遂げた近代化、田園を破壊し、人間と人間を結びつけてきた精神的つながりを捨て去り、ただ金のみが物を言うエゴイズムの世界に、漱石は不快感を顕にしている。

古きよき時代の平凡極まる生活をリアルに描きだしたオースティンは、南イングランドのハンプシャーの片田舎村ステイヴントンに生まれた。イギリス有数の田園地帯でsensitivity豊かに育った彼女は、しかし、senseを最大の武器にして小説を書いていった。ファニー・バーニーというイギリス最初の女性作家の作品を愛読していたが、ファンタジーやロマンスを書かず、「尋常他奇なきの天地を眼前に放出して客観裏に其機微の光景を楽しむ」<sup>17)</sup>ような平凡な世界をごく平凡に書きあげた。田舎の中産階級の娘たちが、いかにして男性を見つけ、結婚していくのか、ただそれだけを写実していったにすぎない。流行作家でもなかった女性作家、オースティンの『高慢と偏見』の第1章を取りあげて、「優に鬚眉の大家を凌ぐ」とまで持ちあげた漱石の眼力はさすがである。この、一見全く何の思想もないオースティンの小説の中に、漱石は反近代の「田園の生活」を読み取ったとも言えるだろう。

## ②シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55)、『ジェイン・エア』(Jane Eyre,1847)

この作品ほどヴィクトリア時代をみごとに表している作品はない。「余った女たち」が結婚という女の自立の道を取らない場合の唯一の道、「ガヴァネス」という職業をリアルに描きだしている。孤児として育ったジェイン・エアが、慈善学校 (charity school) へと送られ、教育を受け、ガヴァネスとして自立して働くという筋立ては、さすがが女性作家の手になる、と思わせる。もちろん、ガヴァネスとして働いた家の主人、ロチェスタ氏と結婚するという結末は、これまでのオースティンの描

く結婚小説と同じパターンと言える。しかし、結婚を言い寄られた牧師を拒絶し、自らの意志で目の見えなくなったロチェスタ氏と結婚するというこの作品は、イギリス小説の中で、女性の側から結婚宣言をした第1号と言えるかもしれない。

ただ、シャーロット・ブロンテのこの作品がしばしば「革命的」<sup>18)</sup>と言われる所以は、もっと大きなところにある。それは、これまでヴィクトリア時代を支配していた三大権威、① religion (宗教) ② parents (親) ③ machine (機械) というものをことごとく否定したことにある。主人公ジェイン・エアは神を神とも恐れぬ「高慢な人権思想」の持ち主である。そのために、神父にこっぴどくやられていじめられるのであり、キリスト教の慈善学校のまやかしをこれほど鋭く暴露した小説は他にはないとも言える。また、ジョン神父の「妻としてインドに行ってくれ」という求愛を、はっきりと拒絶したジェイン・エアの態度は、当時のインド支配をもくろむイギリス政治そのものへの批判を含んでいる。

家長長制のもとでの親の権威を拒否したことは、ジェイン・エア自らが育ての親に反抗し、慈善学校で暮らすという設定の中にも明らかである。「家庭の天使」となるために育てられたヴィクトリア時代にあって、牧師の妻になることを拒否し、ロチェスタ氏に扶養される結婚を拒否したジェイン・エアの行動は、「飢えた40年代」に突如現われた男女平等主張の革命的行動と呼べよう。

また、当時のイギリスは、農業国から工業国へと変革し、機械万能の時代にあって、国外では植民地主義を押し通していた。そういう機械万能の時代の中にあって、工業化に伴うロチェスター氏の所有するソーンフィールドの没落があったにもかかわらず、最後には人間と人間との感情が勝利するというこの小説の筋立ては、やはり反ヴィクトリア時代的と形容できる。さらには、牧師のジョン・リヴァーズのインドでの独身生活ぶりを最後に示して終わるこの小説の結末は、シャーロット・ブロンテの反植民地主義を暗示していると言えるかもしれない。

いま1つこの小説で見逃せないことがある。それは、マスコミ時代の到来を象徴的に描いている点である。ジェインは、『ヘラルド』紙に求職広告を出して、ソーンフィールドの7歳の少女アディラ・ヴァランスのガヴァネスとなることができた。年30ポンドの給料をもらえたそのきっかけが、新聞広告であった、ということは象徴的である。広告によってガヴァネスの職を見つけることができる。それは取りも直さず、少なくとも中産階級の人々が新聞や雑誌に目を通していたことを意味する。また、1855年の「スタンプ税」の廃止によって、新聞、雑誌の発行に課されていた悪名高い知識税も姿を消して新聞の値段も安くなり、一般大衆でも新聞が読めるようになった。公教育の普及によって、19世紀の半ばにかなりの人々が字が読めるようになっていたことが分かる。ガヴァネスという職業そのものが、わが娘、わが息子に読み書きの手ほどきを教えることであり、この時期識字率も高まっていた。1833年「連合王国の工場の児童および年少者の労働を規制する法律」によって、9歳未満の幼年者の雇用が禁止されただけでなく、工場労働者の児童は1日最低2～3時間は学校で教育を受けなくてはいけなくなった。50%ほどの識字率が、1850年には69%、1860年には74%、1870年には80%と着実に伸びている。<sup>19)</sup>さらに、ガヴァネスという仕事に関して、この小説ほどリアルに描きだした小説も珍しい。ジェインはもともと身寄りのない孤児であり、決して中産階級のお嬢さんではない。慈善学校では慈善の裏に潜む偽善性に反発しつつも真面目に勉強し、優秀な成績をと

ることで、ガヴァネスとなることができた。何よりも特徴的なのは、ジェインが「器量が悪い」ということである。『パミラ』の主人公はその「器量のよさ」で若旦那を魅了した。「美德は報われる」という副題も、パミラの美しさ故にパミラの純潔さがより以上に生きてくる。フィールディング (Henry Fielding, 1707-1754) の手にかかって『シャミラ』(Shamela, 1741) となると、シャミラは若旦那を「色気」で魅了してしまふ。あばずれ女であっても容姿は「美しい」。これまでの小説では、女性主人公はみな美人であった。

しかし、シャーロット・ブロンテはジェインを「背が低く無器量」な女性主人公として登場させた。ガヴァネスの求人広告で「求む。容姿端麗ならざるガヴァネス」<sup>20)</sup>とあるのは、仕事柄極めて大切なことであった。住み込みの家庭教師として永年同じ家の中で生活をともにするガヴァネスがシャミラのように自分の夫を魅了してしまつては雇い主の妻はたまつたものではない。「器量が悪い」ということが、ガヴァネスの必須条件であった。自らもガヴァネスを体験したシャーロットならではの描き方である。

『ジェイン・エア』は、女性主人公ジェイン・エアの自立への旅立ちの小説であることは誰の目にも明らかだが、それ以上に、ヴィクトリア時代の *respectability* という価値観、道徳観そのものの拒否、まさしく女性が女性として己れの感情を受け身ではなく、能動的に男性に対して示すことを教えた、イギリス小説第1号だった、と言えるのである。

#### (5) ヴィクトリア時代の男性優位思想と進化論

ヴィクトリア時代を示すことばをあげよ、と言われれば *respectability* や *Great Exhibition*、あるいは *puritanism*、*magazine* などをあげる人もいるだろう。しかし、この時代を象徴する最も適切なことばをあげよと言われれば、わたしはためらうことなく、‘the survival of the fittest’ (適者生存) をあげる。ヴィクトリア時代の中期、1859年に出版されたチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) の『種の起源』(*The Origin of Species*, 1859) には、*natural selection* (自然淘汰=自然選択)、*struggle for existence* (生存闘争)、*the survival of the fittest* (適者生存) というこの時代を象徴的に映しだすことばが数多く見いだせる。もちろん、*the survival of the fittest* という用語はダーウィンの造語ではなく、スペンサー (H. Spencer, 1820-1903) からの借用語であり、1869年の第5版でダーウィンが採用したものであった。*natural selection* よりもより強いニュアンスがあり、「最適者生存」というヴィクトリア時代の自由進歩思想の本質をズバリ言いあてている、と言えるだろう。

また、『種の起源』が出版された1859年には、ヴィクトリア時代を象徴的に写しだす本があと2冊出ている。その1つは、フローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) の『看護覚え書』(*Notes on Nursing*, 1859) であり、もう1つは、サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の『自助論』(*Self-Help*, 1859) である。「天は自ら助くるものを助く」という、ピューリタニズムの自立的勤勉の精神を説いたこの書物は、イギリスで1859年だけで2万部、1905年までに25万部以上も売れ、日本においても、明治4年に中村正直によって『西国立志編』と題して翻訳されている。<sup>21)</sup> 世界中で翻訳され、『自助論』はイギリス以外の国でも多大な影響を与えた。小説の抬頭が、市民社会の中での個人の誕生が重要な役割を果たしたことは周知の事実だが、デフォーの『ロビン

ソン・クルーソー』の中で、主人公が無人島でただ独り生活していくその姿こそ、スマイルズが主張した自助の精神そのものであったと言える。

一方、ナイティンゲールの『看護覚え書』には、まず、こう記されている。

今や小説は、あらゆる階級の女性の読み物の大きな部分を占めつつありますし、型にはまった誤解や無知を世間に広めるのに、大きな役割を果たしているのです。<sup>22)</sup>

看護婦としてクリミア戦争（1853-56）で活躍したナイティンゲールは、現在でも10ポンド紙幣に肖像が印刷されているほどイギリスでは人気が高い。看護婦という仕事を医者と同じく、高度な科学的観点から見つめ直そうとしたキャリア・ウーマンの先駆者である。31歳の時、ドイツのライン河の畔にあったカイザースヴェルトの病院で初めて看護婦として働いている。1851年、世界万国博覧会が華やかにハイパークで行なわれた時もまだドイツにいたが、それからパリに移り、1853年にイギリスのロンドンのハーレイ街にあった「困窮女性救護院」の看護婦となった。1854年9月、英軍がクリミアに上陸し、ナイティンゲールは10月21日には、看護婦を志願して英国を去り、スクタリに向かっている。1856年2月に戦争が終結し、イギリスに戻るが、1859年に、『病院覚え書』と『看護覚え書』の2冊を書き、1860年にはナイティンゲール基金によって「ナイティンゲール看護学校」を開設したのだった。

『看護覚え書』は、1ヵ月で1万5000部も売れるベストセラーとなったが、「換気と暖房」といった、極めて具体的な病院設備の整備の必要を述べたものとして当時の男性医者たちからも絶賛された。しかし、この『覚え書』が、ユニークなのはヴィクトリア時代中期にあつて、イギリス国内に蔓延していた女性差別の世論そのものを辛辣に批判したということである。

男性ばかりでなく、女性自身の間においてさえ、女性が立派な看護婦になる条件は、失恋、失意、厭世の気持ちにさすか、あるいは他に何1つできないか、そのどちらか1つで沢山さ、ということのようです。これはある教区で愚かな老人が「昔豚を育てていた」からとの理由で、校長先生になったという話を思い出させます。<sup>23)</sup>

看護婦とはどのようなものであるべきか、ということ定義して、あらゆる男性、そして医師さえもが必ずきまって言うのは、「献身的にして従順」ということです。この定義は赤帽にはびたりと当て嵌まるでしょう。馬にも当て嵌まるかもしれません。でも、巡査には当て嵌まらないのではないのでしょうか。<sup>24)</sup>

この本は1冊5シリングもする高価なものだったが、1861年に、『労働者のための看護覚え書』をわずか7ペンスの廉価版で出版し、ナイティンゲールは女性のためだけでなく、労働者のために執筆した極めて希な女性作家となったのだった。

1859年に出版された3冊の書物は、それぞれがヴィクトリア時代の女性差別を語っている。スマイルズは立身出世の「身を立て名をあげ」た人々の立志伝を書いたのだが、そこに登場する人物のこ

とごとくが男性であったことは象徴的である。また、ナイティンゲールは、看護婦という仕事を、ハウスメイドやパーラーメイドなどと同じように、卑しい女がやるものと考えていた当時の風潮に対し、看護婦の仕事がいかにか人間の生命の尊厳と関わる科学的知識を必要とする仕事であるかを力説した。そして、ダーウィンの進化論は、実際には科学的なデータに基づいて適者生存の法則を語ったにすぎないのだけれども、一般的にはその適者こそが、アフリカの黒人やアメリカのインディオや、インド人ではなく、白人男性であるという誤解を与え、女性もまた、その適者の仲間に入らないという考えを読者に植えつけていったことは、不幸なことであった。

### (6)進化論と女性差別

1859年に出た3冊の書物は、それぞれにイギリスの読者だけでなく、世界中に読者を持ったことで、産業革命を経たイギリスの文化水準の高さを示す画期的なできごとであったと見て間違いはない。その中でも、ダーウィンの『種の起源』は、ダーウィンが主張したかった以上に、ヴィクトリア時代の人々に「性差の科学」として受け入れられた。ダーウィン自身は、雄と雌との違いを科学者の目で捉え、科学的に論じたつもりだったが、シンシア・イーグル・ラセット (Cynthia Eagle Russett, 1937-) は、『女性を捏造した男たち』(*Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood*, 1989) の中で、ダーウィンの進化論に啓発を受けたダーウィンの弟子たちが、いかに女性差別の科学を発達させたかを論じている。まとめてみれば、次のようになるだろう。

(1) 「骨相学」(Phrenology) はヴィクトリア時代に盛んになったが、男性の頭蓋骨と女性の頭蓋骨の大きさが明らかに違っており、女性の脳の方が平均的に小さいという結論を出した。また、「自然人類学」(Physical Anthropology) を創設した科学者たちは、女性は未開人と同列であり、子どもに近い、と結論した。(Edward Drinker Cope, *The Origin of the Fittest*, 1887 / Havelock Ellis, *Man and Woman: A Study of Human Secondary Sexual Characteristics*, 1894)

(2) ダーウィンの『人間の由来、ならびに雌雄選択』(1871) では、動物に雌雄の性差があるように、人間にも気質と知性に明らかに性差がある、と論じた。「思考力」は男性が優位で、「感情」は女性が優位というヴィクトリア時代の考え方にお墨付きを与え、これ以後さまざまな形での男性、女性の性差が強調された。(George Romanes, 'Mental Differences between Men and Women,' 1887 / Harry Campbell, *Differences in the Nervous Organisation*, 1891)

(3) 「優生学」(Eugenics) という学問が、ダーウィンの従兄フランシス・ゴルトンによって創始され、進化の頂点に「白人」がいるという考え方を当然視した。女性もまた、「ニグロ」や「モンゴル人」と同じく「劣性人種」と見做され、「子ども」「野蛮人」「犯罪者」はいわゆる、「劣性人種」であり、「女性」もまたその仲間とされた。「女性」とは「未発達な男性」と結論づけられた。(Francis Galton, *Inquiries into Human Faculty and Its Development*, 1883 / J. McGrigor Allan, 'On the Real Differences in the Minds of Men and Women,' 1869)

(4) 「エネルギー保存の法則」によって、人間のエネルギーの量も一定に保たれるので、特にエネルギーを必要とする「思考」と「出産」を同時に行なうことは危険である。教育を受けた知

的女性は「生殖力」が落ち、実際「結婚」していないことを、データをあげて科学者は論じた。(Herbert Spenser, 'Psychology of the Sexes,' 1873-4 / Balfour Stewart, *The Conservation of Energy*, 1881 / G. Stanley Hall, *Adolescence*, 1904)

要するに、科学それ自体が、男性中心的で父権的なものだった。19世紀末の知の風景において、科学ほど女性の能力をネガティブに捉えることで意見が一致していた分野はない。科学の分野はおしなべて、男性と女性とは異なるものだという評価を強力に推進してきた。<sup>25)</sup>

以上のように、ラセットは、ヴィクトリア時代とは、まさしくダーウィンに象徴される科学者が、「適者生存」という「男時の時代」に、男たちの都合のいいように女性を捏造した時代であったことを、「ヴィクトリア時代の性差の科学」として明らかにしてくれた。しかし、なぜそれほど女性差別がヴィクトリア時代に存在したのか、というその根本的な問いに対しての答えは用意されていない。

### (7)女性差別と「魔女現象」

ヒルデ・シュメルツァー (Hilde Schmölzer, 1937-) の『魔女現象』 (*Phänomen Hexe — Wahn und Wirklichkeit im Lauf der Jahrhunderte*, 1986) を初めとする最近の「魔女」研究によってイギリスだけでなく、ヨーロッパ全体を襲った「魔女裁判」が実はその根底に「女性差別」があったことを明らかにしている。なぜ魔女として女性が殺されたのか、ということにシュメルツァーは、3つの原因をあげている。①キリスト教信仰での女性の否定的価値づけがあり、②女性の社会的価値が低かったし、③古代的異教的信仰に女性が関わっていた。<sup>26)</sup>

また、浜林正夫、『魔女の社会史』(1978)では、カソリックを信仰していた女王メアリによるプロテスタント迫害を逃れて大陸に渡った、プロテスタントの神学者たちがイギリスにおいて魔女概念を持ち込んだのであり、1559年帰国した神学者、ジョン・ジュエルが魔女迫害法 (1563) を作ったという、ノートステイン、『イングランド魔女史』(1911)での解説を紹介している。<sup>27)</sup>

しかし、カソリックとプロテスタントの対立といった宗教的対立であれば、なぜ女性だけを witch hunt しなければいけなかったのか、の説明がつかない。ヨーロッパ各地で起こった魔女裁判の悲惨さは想像を絶する。イタリアのコモで1523年だけで1000人が魔女として焼かれ、スペインでは1481年から1746年の間に3万4644人が生きながら焼かれ、1万8043人が処刑された後に焼かれている。比較的魔女裁判が穏やかだったとされるイギリスでも、約3万人の人間が殺されている。<sup>28)</sup>

こうした魔女現象を引きずってきたイギリスにおいて、ナイティンゲールが1859年に『看護覚え書』を出版したことは、極めて大きな意味を持つ。すなわち、中世に猛威をふるった「魔女狩り」が、人間誕生以来の女性の仕事であった産婆たちを迫害、追放してきたことに対する反論でもあったのである。医術に通じた女性はまさしく魔術師と見られ、魔女として迫害される危険を持っていた。実際に、宗教上も、マリアが処女受胎であるなどという非科学的教えに疑問を抱いたのは産婆たちであったことは、容易に想像がつく。

ダーウィンの『種の起源』の出現によって、ヴィクトリア時代にまだ残っていたそうした非科学的「魔女現象」は一掃されるはずであった。が、それとは逆に、当時の科学者たちは、産業革命を

経て、「高度文明社会」の到来を信じていた時代であったにもかかわらず、「性差の科学」を皮肉なことに非科学的に広めていったのだった。

1600年の「東インド会社」の設立によってスタートしたイギリス「商社の時代」は、19世紀を迎え「世界の工場」として繁栄はしたものの、植民地各国は独立運動の気運を高め、イギリスの自由貿易への抵抗も激しくなっていた。これまた、皮肉なことに、『ジェイン・エア』の中で、ロチェスタ氏という地方地主が没落していったように、イギリス国内においては自由貿易によって安価な穀物が大量に流れ込み、イギリスの農業は壊滅する。穀物の自給率は急激に下がり、農家の娘はロンドンに家事奉公に出てゆき、息子は工場労働者となり、植民地へと出かける者もいた。農業人口は激減し、反面ロンドンに流れた家事使用人は1851年の133万人から1871年には191万人、1891年には実に233万人に増えている。<sup>29)</sup>農村の崩壊は、すなわち、自給自足的生活をしていた協同体社会の崩壊でもあった。1900年のロンドンで漱石が見た光景は、まさしく農村から出てきた労働者たちが、疲れを癒すためにパブで酒を飲み続けるというものであったろう。

1869年、ロンドンで生まれた alcoholism (アル中) ということばも、ヴィクトリア時代を裏で支えた労働者を語る時には、忘れられないことばである。「高度文明社会」を目指してただひたすらに経済発展を夢見てつっ走った大英帝国は、その背後に、時代から取り残された弱者、すなわち、想像を絶する貧困の工場労働者とフリーガンの子どもたちと女性たちを取り残していったのである。<sup>30)</sup>

## 付記

(この論文は、もともと1994年10月22日(土)に開かれた「つがやま市民教養文化講座」[守山市野州郡勤労福祉会館「つがやま荘」]での講演を基にしたものである。年12回行なわれている講座の第7回講義であり、100名の一般市民のための講義でもあるので、原書からの引用文もできるかぎり、翻訳を利用し、翻訳の分かりにくい部分だけを若干訂正したにすぎない。民間の教養文化講座として14年間も継続して講座を開き続けている講座担当者、および講座聴講生の皆さんに感謝と敬意を表したい。)

## 注

- 1) 参照、夏目漱石、『文学評論』(漱石全集第10巻、岩波書店、1966年)、pp.168-226。漱石は、第3編「アザソン及びスチールと常識文学」で、18世紀イギリス文学の特徴を不思議なほど力を入れて詳細に論じている。また、内田毅、『イギリス小説の社会的成立』(研究社、1960)、岡本成蹊、『イギリス近代小説の形成』(桐原書店、1975)も18世紀イギリス文学とジャーナリズムについて論じている。
- 2) 参照、浅田實、『東インド会社』(講談社現代新書、1989)、pp.107-26。
- 3) V.ウルフ(西川正身・安藤一郎訳)、『私だけの部屋』(新潮文庫、1952) / V.ウルフ(川本静子訳)、『自分だけの部屋』(みすず書房、1993) / 松村加代子、『私ひとりの部屋』—女性と小説(松香堂、1984)
- 4) 1994年7月、イギリスの大英博物館を訪れた時、「England: Books for Women」という特別展示を開催しており、そこに展示されていた本と、その説明をノートに書き写したものを参考にしている。
- 5) 参照、小林章夫、『コーヒー・ハウス—都市の生活史—18世紀ロンドン—』(駸々堂、1984) /

- 長島伸一、『世紀末までの大英帝国』（法政大学出版局，1987） / 角山栄・村岡健次・川北稔、『産業革命と民衆』（河出文庫，1992）
- 6) 岡本成蹊、『イギリス近代小説の形成』，pp.314-48.（『XI 第18世紀社会事情と小説の誕生』）
- 7) *Robinson Crusoe Examined and Criticized* の中の Charles Gildon の有名なことば。
- 8) 1732年4月の *Gentleman's Magazine* で、編集方針を「あるがままに事実を書き写し、不偏不党の立場で問題を論じているので、後世の歴史家にとってこの雑誌は有益なものとなるであろう」と述べている。（京都橘女子大学の図書館にこの *Gentleman's Magazine* 全巻が揃っているの、参考になる。）
- 9) 現物はないが、特別展示会でノートに書き写してきたものを、翻訳している。
- 10) 展示会での説明文を翻訳している。
- 11) 川本静子、『ガヴァネス』（中公新書，1994），p.14. / 小池滋、『英国流立身出世と教育』（岩波新書，1992），pp.92-128. / 青山誠子、『ブロンテ姉妹—女性作家たちの19世紀—』（朝日選書，1995），p. 87.
- 12) 夏目漱石、『文学論』（漱石全集第9巻，岩波書店，1966），pp. 365-69.
- 13) *Ibid.*, p.365.
- 14) *Ibid.*, p.370.
- 15) 東秀紀、『漱石の倫敦、ハーワードのロンドン』（中公新書，1991），pp.20-21.  
 / 参照，矢本貞幹、『夏目漱石』（研究社，1971） / 今井宏、『日本人とイギリス』（ちくま新書，1994）
- 16) 参照，エンゲルス（岡茂男訳），『イギリスにおける労働者階級の状態』『全集』2（大月書店，1960）
- 17) 夏目漱石、『文学論』，p.369.
- 18) 参照，山脇百合子、『英国女流作家論』（北星堂書店，1978），p.66.
- 19) 長島伸一、『大英帝国』（講談社現代新書，1989），pp.116-19.
- 20) 川本静子、『ガヴァネス』，p.33.
- 21) 参照，松村昌家、『明治文学とヴィクトリア時代』（山口書店，1981），pp.3-24. / 小池滋、『英国立身出世と教育』，pp.10-18.
- 22) フロレンス・ナイティンゲール（湯楨ます他訳），『看護覚え書』（現代社，1968），p. 245.
- 23) *Ibid.*, p.212.
- 24) *Ibid.*, p.224. 参照，ルーシー・セーマー（湯楨ます訳），『フロレンス・ナイティンゲール』（メヂカルフレンド社，1965），pp.231-32. / バーバラ・ハーメリンク（西田晃訳），『近代看護の創始者、ナイティンゲール伝』（メヂカルフレンド社，1979） / エドワード・クック（中村妙子他訳），『ナイティンゲール [その生涯と思想]』 I, II, III（時空出版，1994，1995）
- 25) シンシア・イーグル・ラセット（上野直子訳），『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学—』（工作舎，1994）
- 26) ヒルデ・シュメルツァー（進藤美智訳），『魔女現象』（白水社，1993），p.21.
- 27) 浜林正夫，『魔女の社会史』（未来社，1978），pp.67-73.
- 28) ヒルデ・シュメルツァー，『魔女現象』，p.195.
- 29) 長島伸一，『大英帝国』，p.131. / 参照，角山栄・川北稔，『路地裏の大英帝国』（平凡社，1982）
- 30) 井野瀬久美恵，『子どもたちの大英帝国』（中公新書，1992年） / 川北稔編，『「非労働時間」の生活史』

(リプロポート, 1987)

本論文で論じた書物の日本における翻訳書（本文中で示したものについては省いている。）

1. Daniel Defoe, *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (1719)
  - 小山 東一、『ロビンソン・クルーソー』（新潮文庫、昭和14年）
  - 野上豊一郎、『ロビンソン・クルーソー』全4巻（岩波文庫、昭和21～22年）
  - 吉田 健一、『ロビンソン漂流記』（新潮文庫、昭和26年）
  - 平井 正穂、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』全2巻（岩波文庫、昭和41～42年）
  - 佐山栄太郎、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』（旺文社文庫、昭和42年）
  - 能島 武文、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』（角川文庫、昭和42年）
  - 平野 敬一、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』（中央公論社、昭和46年）
2. Samuel Richardson, *Pamela, or Virtue Rewarded* (1740)
  - 篠田 銀策、『パミラ』（研究社、昭和17年）
  - 海老池俊治、『パメラ』（筑摩書房、昭和41年）
3. Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (1726)
  - 中野 好夫、『ガリヴァ旅行記』全2巻（世界文庫、昭和15年）
  - 町野 静雄、『ガリヴァ旅行記』全2巻（改造文庫、昭和16年）
  - 野上豊一郎、『ガリヴァ旅行記』全2巻（岩波文庫、昭和19年）
  - 中野 好夫、『ガリヴァ旅行記』（筑摩書房、昭和34年）
  - 斎藤 正二、『ガリヴァ旅行記』（角川文庫、昭和39年）
  - 江上 照彦、『ガリヴァ旅行記』（現代教養文庫、昭和45年）
  - 平井 正穂、『ガリヴァ旅行記』（岩波文庫、昭和50年）
4. Sir Philip Sidney, *Arcadia* (1590)
  - 村里 好俊、『ニュー・アーケイディア』第1巻（大阪教育図書、平成元年）
5. Jane Campion, *The Piano* (1992)
  - 斎藤 敦子、『ピアノ・レッスン』（新潮文庫、平成5年）
6. Henry Fielding, *An Apology for the Life of Mrs Shamela Andrews* (1741)
  - 能口 盾彦、『シャミラ』（朝日出版社、昭和60年）
  - 和田 敏英、『パミラ異聞』（開文社、昭和62年）
7. Jane Austen, *Pride and Prejudice* (1813)
  - 富田 彬、『高慢と偏見』全2冊（岩波文庫、昭和25年）
  - 中野 好夫、『自負と偏見』上・下（新潮文庫、昭和38年）
  - 近藤いね子、『高慢と偏見』上・下（講談社文庫、昭和47年）
8. Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (1847)
  - 遠藤 寿子、『ジェイン・エア』上・下（岩波文庫、昭和33年）
  - 田中西二郎、『ジェイン・エア』（筑摩書房、昭和35年）

大久保康雄、『ジェイン・エア』全2巻（新潮文庫、昭和35年）

神山 妙子、『ジェイン・エア』全2巻（旺文社文庫、昭和42年）

田部 隆次、『ジェイン・エア』（角川文庫、昭和42年）

河野 一郎、『ジェイン・エア』（中央公論社、昭和43年）

9. Charles Darwin, *The Origin of Species* (1859)

八杉 龍一、『種の起源』上・下（岩波文庫、平成2年）

10. J.A. and Olive Banks, *Feminism and Family Planning in Victorian England* (1965)

河村 貞枝、『ヴィクトリア時代の女性たち—フェミニズムと家族計画』（創文社、昭和55年）